
俺のリサちゃん！

PATACO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺のリサちゃん！

【Nコード】

N8414A

【作者名】

PATACO

【あらすじ】

あの有名な人形「リサちゃん人形」と28歳のサラリーマンが繰り広げる、ドタバタ奮闘記！

リサちゃん人形

こんにちは。俺の名前は茨木雅樹いばらみやまきです。28歳で、サラリーマンしてます。

「パパあ？」

「ん？」

「パパ、ケーキ屋さんね」

「お、おう」

4歳の娘、夏樹なつきもいます。

「夏樹、今パパ忙しいですよ。パソコンしてる時は邪魔しない約束でしょ？ママがケーキ屋さんしてあげるから」

麗かなみしき妻、華夏美かなみもいます。ちなみに26歳です。

「えーママがやるの？ママ料理下手じゃん」

「いいじゃないの！遊びなんだから！」

「リアリティに欠けるわっ！」

「どこでそんな言葉覚えたのよっ！」

「うわあママが怒ったあ！」

夏樹は走り去る。

「待てー！食い逃げじゃー！」

いやいや、違う違う。

華夏美は娘を追いかける。…また下の階から苦情来るぜ…。

実は俺、最近までアメリカに行っていました。夏樹が1歳の頃から最近までずっと向こうにいたので、かなり久しぶりの日本を満喫している。

単身赴任中の俺が娘の成長を知るには、専らインターネットに限る。俺のパソコンは、娘の写真でいっぱいだ。

だが、最近悩みがあります。

『なあー！雅樹よ！腹が減ったぞー！』

…娘の部屋に居座るアレだ。

俺が帰国して、娘の部屋に入ったある日のことだ。その日娘の部屋を開けると、奴はいたのだ。娘は地面で絵を書いていた。その背後のベッドの枕の上に、奴がいた。奴は枕の上で薄ら笑いを浮かべて俺を見ていた。

『よお。お前が夏樹の父親か？』

…喋った。

俺は入りかけた娘の部屋から出た。

意味わかんねえよ。

深呼吸してもう一度ドアを開ける。

『無視すんじゃねえよ、ハゲ』

ハゲてねー！！！！

「パパ？」

娘が不思議そうな顔をして俺を見上げた。

「何だ、あの悪人面の人形は」

娘は振り返る。

「リサちゃん？」

「そうだ、あいつ……ああ?!」

人形はいつもの営業スマイルに戻っていた。

「昨日ト　ザラスでママに買ってもらったの」

「へ……へえ……」

娘はまた絵の方に向き直って続きを再開した。

すると人形はまた悪人面をして

『可愛い娘だな』

と言ってきた。

『あたしに向かって悪人面とは何だ。あたしは全世界のアイドルだぜ? わかってんのかよハゲ』

「ハゲてねーよ!」

「何言ってるんのパパ」

娘はまた不思議そうな顔をして俺を見上げる。

「あ……いや……」

人形を見ると腹を抱えて笑っている。

……あのクソ女……!

俺の日本の温かい家庭は、音を立てて崩れていくのである……。

犬とリサ

昨日は夏樹と華夏美は出かけている。俺はひとりでのんびり…できるわけがない。

『なあ、雅樹よ』

「何ですか」

『夏樹の服の趣味、どう思う?』

ソファーに座る俺の目の前の机に、あぐらをかいているリサが言う。

「可愛いんじゃないですか」

『いやあ、あたしにはロリータの趣味はないんだよなあ』

「そうですか。じゃあそろそろ部屋に戻ってください」

『寂しいこと言うなよ。いいじゃねえか』

部屋に入ると開けると喚き散らすので、仕方がない。

「俺と喋ってて楽しい?」

『いや全然』

ガン

人形に言われても若干ショック。

「なんで俺としか喋らないの?」

『おつ、ハゲてるわりにはいい質問するじゃねえか!』

「いや…だから俺ハゲてねーし…」

『あたしがお前としか話さないわけはだな』

無視かよ…

『夏樹を相手にすると、こんな言葉遣いすると夢を壊すしよあ、幼稚園の友達をわんさか連れてこられていじりまわされるのがオチだろ?華夏美だと、これもまた近所のババアに知れ渡っていじりまわされるのがオチだろ。お前なら、オッサンが人形が喋るなんて他人

に言ったら、狂ったと思われるだろうから他言しねえだろ？」
まあな。いい歳こいた俺がそんなこと言ったら頭が狂ったと思われるだろうな。

「それはそれは頭のよろしいことで
「だろ？」

そう言うとロリータ女はニカツと笑って見せた。白い歯が覗く。
ブロンドのストレートヘアを腰まで伸ばし、愛らしい目に整った鼻、
きれいな唇。長い手足、白い肌。幼い女の子が憧れる完璧な美人だ。
「…もう少しおしとやかににはなれないだろうか…」

「ああ?!何か言ったか？」

「…いえ…別に…」

ゴスロリ女は大口を開けてあくびをした。

…いつか絶対燃やしてやる。

ワンっ!!

俺の足元で茶色いダックスフントの蜜柑が吠えた。

「おっ!犬!」

ロリータ女は机から身を乗り出して犬を見た。

「乗せろ!犬!」

蜜柑は尻尾を振ってリサを見ている。リサは机から飛び降りて蜜柑
の背中に飛び乗る。

「うほ〜いい!」

蜜柑は面白がって走り出した。

「うきや〜こりや最高だぜ〜犬!」

…これで暫くゆっくりできる…

俺ソファーに横になって目を閉じた。

目が覚めた時、ロリータ女が顔に乗っていたわけだが…。

言いなり

『おっ、今日はそうめんか？夏だねえ』

リサは夏樹の膝の上から食卓を覗いている。

『なあ雅樹よ。頼みがあるんだけど』

俺はリサを無視して華夏美の手伝いを続ける。

『無視か。いいんだな、あたしを無視するならここから飛び上がって夏樹のアゴにカーンとぶつかってだな、夏樹は舌を噛んでうわあ〜ってなことに…』

「わかった、聞くよ」

「あなた何言ってるの？」

「いや…独り言」

リサを見ると、例の薄ら笑いでこつちを見ていた。

『あたし、めんつゆで汚れたくないわけ。だから夏樹にそれを伝えてくれよ』

「…夏樹、人形を部屋に置いてきなさい」

「なんで？」

「せつかくのお洋服が汚れたら可哀想だろ」

「そうだね」

夏樹はリサを部屋へ置きに行った。

ああ、静かな食卓だ…幸せだ…。

食事が終わると、夏樹と妻は風呂に向かった。

家族は愛しているが、こうやってひとりになれる時間も大切だ。

『おーい！夏樹たちが上がったらあたしも風呂に入れてくれー！』

…俺に安らげる時間はない…。

俺は夏樹の部屋を開けた。人形は当たり前のように枕の上であぐらをかいてこちらを見ている。

「なんで俺に頼む？」

『さつき言いそびれたんだよ』

「人形なんだし、別に明日夏樹と入ればいいじゃないか」

『今日夏樹にカスタードつけられたんだよ、頭に』

「だから？」

『明日まで待てん』

「待てよ」

『…いいんだな、夏樹が眠った後、絶えずほっぺをつついて安眠妨害をだな…』

「やります。洗わせていただきます」

「あれー？パパあたしの部屋で何してんの？」

夏樹が部屋に入ってきた。

「ちよつとな…」

「ふーん。あ、お風呂パパの番だよ」

「はいはい」

俺はリサを持って部屋を出る。

「リサちゃんどこに連れて行くの？」

ドアを閉めようとする俺に夏樹が聞いた。

「風呂だよ。夏樹、この人形汚れてるぞ？」

「あ、リサちゃんの上にシュークリーム落としたんだっただけそりゃ汚れるわな。」

「トリートメントもしてあげてね、パパ」

「あー…はいはい」

「リサちゃん行ってらっしゃーい」

俺は夏樹の部屋を後にする。

風呂へ向かう途中で華夏美にすれ違う。

「あら、あなたリサちゃんとお風呂？…ぶっ」

今…今笑ったぞうちの嫁は…！

「夏樹がカスタードつけてるんだよ、頭に」

「あら、ほんと。よく気づいたわね」

華夏美は人形を見て言った。

「まあな…」

まあな…としか言えねえ。人形に聞いただなんて言えねえ…！

新たなる地獄への序章

俺はそのブロンドの髪をかき上げ、首もとから腰にかけて締められているマジックテープを外す。服をすり下ろすとしなやかな身体が現れる。白い肌、細い腰………って待て。官能小説かよバカ野郎。言っておくけど、俺、人形に性欲感じるタイプじゃねえから！

『…やらしいこと考えてんじゃねえだろうな』

「馬鹿かコノ野郎」

『あつはつはつ。あたしのナイスバディにムラムラしてるくせに』

「燃やすぞ」

『ハッ。娘の悲しむ顔が見たいのかよ』

手の中のクソ人形は鼻で笑っている。

俺は苛立ってそいつを湯船に投げ込む。

『何するんだよ！投げんな！』

「うるせえ」

人形は湯船の縁に掴まってこっちを睨んだ。

俺もシャワーで軽く体を流して湯船に浸かる。

「はあ〜っ」

気持ちよさに溜め息が漏れる。

『気持ちいいなあ。これぞ極楽』

「お前はオッサンか」

暫く湯に浸かっていると、リサが湯船から出た（と言うか、湯船の縁から飛び降りた）。そして俺に洗面器に湯を入れると命令し、その湯で体を洗い始めた。俺はその様子をぼーっと眺めていた。…俺、人形と風呂に入ってるぜ…？

その後俺たち（俺たち？）は風呂から出てリビングへ戻った。

「リサちゃんきれいになっただあ？」

「ああ」

自分で自分の頭洗ってましたよ…。

「じゃ、あたしがドライヤーしてあげるう」

夏樹は俺の手から裸のままのリサを取った。するとリサが叫んだ。

『雅樹！ダメだ！止めてくれ！ドライヤーはダメだ！髪が縮れるう』

！』

…ぶっ！（笑）

俺は笑いを堪えながら、夏樹にやめるように言った。

ドライヤーの熱で縮れたりサの髪も見たかったように思う。ふふふ。

俺がリビングで風呂上がりのビールを飲んでいると、夏樹が部屋から出てきた。手にはピンクのネグリジエを着せられて不機嫌そうなりサが握られている。俺はまた笑いを堪えるのに必死だった。

まあ、何はともあれ今日も1日が終わる。

…俺、死んでまうマジで…。

このままじゃ俺はいい年こいた人形オタクだ。アキバだ。…地獄だ。どうする…燃やすか…？いや、そうすれば夏樹が泣く…ああ、俺はどうすればいいんだ…！

その時悪魔の囁きが聞こえてきたのだ。

『なあ、雅樹よ。今度の日曜日夏樹と一緒にトイザ ス連れて行ってくれよな』

∴ ああ神様あ！！

家族、増える

ああ…

23時58分…

23時59分…

0時00分…

ああー！！ついに日曜日になっちまったぜ！

俺は今日、悪魔と夏樹をトイラスに連れて行かなければならない…。
もうほとんど人形恐怖症だぜ俺…！

…眠れねえし！！

「あなたあゝごはんよ…起きて〜」
リビングから妻の声が聞こえる。麗しき妻の声も、今じゃ悪夢だ。
お願いだから今日は起こさないでくれ。寝室から出さないでくれ…。

ばふっ！

「うっ」

「パパあ」

「夏樹…重い…」

夏樹が俺の上ののしかかってきた。俺はイヤイヤ目を開けた。お腹の上に夏樹が乗っかっている。ああ、今日ばかりはこの可愛い娘も

小悪魔だ。

『やあ。おはよう雅樹くん』

…はっ！

俺は冷や汗を浮かべながら左に首をひねる。

『おはよう』

ああー！！！！

俺は夏樹を抱えて寝室を出た。

「あつ、ちよつと…パパ、リサちゃんが」

「あいつはまだ眠いんだとよ！」

「そうなの？」

「そうなの！」

俺は食卓に着く。

「いただきます！」

俺は熱いコーヒーをグビグビ飲みこんだ。

朝食を食べていると夏樹が横から話しかけてきた。

「パパあ、今日はあたしとイザラスよ？」

「…ああ…」

わかっているさ…わかっているとも。

俺たちは昼食を済ましてから車でオモチャ屋へ出かけた。

「なあ夏樹、なんでオモチャ屋に行きたいの？何が欲しい？」

俺は後部座席のチャイルドシートに座る夏樹に話しかけた。手には
ロリータ女が握られている。

「ママがね、リサちゃんの服とお友達買っていいよって言ったの
そうだろうな。わかっていたさ。」

「お願いだから大人しそうな子を買ってくれよな」

「ん？」

俺は娘にはわけのかわらないことを口走っていた。信号待ちで後ろ
を見ると、あの悪魔がニヤニヤしていた。

俺は呪われているんだ。絶対そうだ。

俺は夏樹と手を繋いでオモチャ屋に入店した。ヤバイ：背中に冷や
汗が。

そして遂に地獄へ。リサちゃん人形コーナーだ。夏樹は俺の手を離
して早速洋服コーナーへ走った。輝く瞳できらびやかな洋服を見て
いる。

俺は周りを見回してみた。リサによく似た色んなタイプの人形が並
んでいる。寒気がするぜ。

「パパ、これがいい」

夏樹が足元で俺を見上げていた。手にはメイド服が握られている。

俺は笑いがこみ上げてきた。リサ、メイドなんてガラじゃねえし！
本人も嫌がるだろう。本人は特攻服とかが欲しいだろうに。

「でね、お友達はこれね」

来た。来たぞこの瞬間が。俺は恐る恐る人形の顔を見る。

「…いいんじゃない？可愛いじゃないか」

人形は、ブルーのセミロングヘアで、毛先が外側にカールしている。
顔はリサ（営業スマイルの時）より大人しそうな顔つきで、右に涙
ホクロもある。リサよりもいい子そうだ。いや、あれより性格の悪
い奴なんていねえだろう。

「だよね！可愛いよね！決まり！」

俺たちはそれから華夏美に頼まれた買い物なども済ませて買って家
に帰った。

マリリン登場

新しい人形を買って来た日は夏樹は疲れて晩御飯も食べずに寝てしまい、結局そのまま、まだ人形は箱の中のままだ。

ところが、いよいよ今日開けるらしい。しかもたまたま俺は仕事が休み。…ドキドキの一瞬です。また悪魔か…はたまた…？

「パパあゝ見て」

夏樹が部屋から人形を連れてくる。右手には新しい人形。左手にはブロンドのロングヘア（悪魔）。俺はもう…胃が痛え。

「マリリンちゃんなの」

髪の毛が青いからマリリンか？そのままだなあオイ。

「へゝそうか」

「うん！」

夏樹は嬉しそうに笑って、リビングで遊び始めた。可愛い娘の手には、美女がふたり（片方は悪魔です）。俺は新聞を読み始めた。

ピンポーン！

玄関のインターホンが鳴る。夏樹がインターホンの受話器を取る。

「はゝい。誰え？」

「あたし〜」

「あゝ！」

どうやら夏樹の友達らしい。

「パパ、あたし遊んでくるから！」

娘は玄関へと走って行く。

「短い針が？」

「5！！」

「行ってらっしゃい」

娘に門限を確認させると、俺は娘を見送った。

…さて。華夏美は隣の奥さんとデパートのバーゲンだ。床には2体の美女。この状況からするともちろん…

『ふう。遊びに行ったぜ』

喋りますよね。そうですね。

『…どうも、はじめまして』

マリリンが俺とリサに挨拶をした。リサと違ってご丁寧に正座だ。なんて礼儀正しいんだあ!!

『まあ、そう固くなるなっ！くつろげ!』

お前はくつろぐな。

『でも…あたし、人と喋るの初めてだし…』

『気にすんなよ。こいつはバカだしハゲてるし、ただの人形オタクだぜ？あははは』

殺す…絶対燃やす…。

『失礼ですよ！ハゲてないじゃないですか!』

嗚呼、なんていい子なんだああ！

『…バカで人形オタクかどうかは知りませんが…』

いや、いやいやいや…そこも否定してよ…。

『あ、そうだ。みか〜ん!』

リサが蜜柑を呼ぶと、蜜柑が元気よく走ってきた。

『こいつ、背中に乗せてくれるし、あたしたちをオモチャにもしね

えし、いい奴だぜ」

「…犬」

あれ？マリンの表情が…？

『どうした？マリン』

『犬うううう！…！』

マリンは突然立ち上がって蜜柑にしがみついた。蜜柑は若干びびつて固まっている。

『犬！犬！…よ〜しよしよし！よ〜しよしよし！…可愛いなあ！』

…ムツゴ ウさんだ！

『この毛並みがたまりませんなあ！いや〜この瞳も最高ですなあ！』

また変なキャラが増えたー！

小悪魔マリンの提案

『ねえ、どうして雅樹さんとか喋っちゃいけないの?』

『それはだな、話すと長くなるんだよ。まあ手短かに話せば、要は雅樹が人形オタクだからだな。うん』

『へ』

いや、違うから…。

ある休日、妻と娘が揃って外出している時に、ふたりがそんな話をしていた。

俺はリビングの机の上でノートパソコンを広げて資料をまとめていた。その机の上でふたりが話しているのである。否応無しにチラチラふたりが視界に入るのだ…。

『おい、何してるんだ?』

「仕事」

『大変ですね』

「まあね」

『それにしてもお前眼鏡似合うな、別に知的キャラじゃねえのに! あははは』

うっせえよ悪魔。

あ、ちなみに俺、新聞読む時とか仕事中は眼鏡かけてます。

『会社つて、やっぱり大変か?』

「そりゃあ多少はね」

『セクハラ上司のいじめとかお同様の嫌味とかですか…?』

「…いや、俺一応男だし…そういうのって女社員の悩みだろ普通」
マリン…お前結構アホだろ…。

『それにしても暇だなあ』

「じゃあ寝てろよ。うっとうしいし」

『うつせえよハゲ！眼鏡！』

「ハゲてねえし！しかも眼鏡って悪口じゃねえし！」

『あ…あたし、いいことを思いつきました！』

『何？』

何か嫌な予感が…

『雅樹さんの会社を見学しましょう！』

ほら…そんなことだろうと思ってたよ…

『いいなあそれ！』

「却下」

『なんでだよ！！』

「俺、人形オタクって思われたくねえんだよ」

『今更じゃねえか！』

いやいや…。

「俺、女子社員にモテないわけでもないし、大事な仲間やクライアントだっていっぱいいるんだよ。だから人形オタクとか思われたくねえんだよ。わかった？」

『…わからんな』

クソ女め…！

「第一、お前たちを会社に連れて行ったとして、夏樹はどうする？寝る時までお前らと一緒になのに、寂しがるだろ。泣くぞ？」

『じゃあ体は家に置いて、頭だけ連れていけよ』

「余計泣くわアホ！」

『じゃあどうするんだよ』

「だから会社に来なけりゃいいだろう！」

『イヤ』

「黙りなさい」

『イヤだね』

「言ってる」

『イヤだ〜イヤだ〜』

「あ〜うるさい〜！」

俺とリサは子供の口喧嘩レベルの言い合いをしていた。すると突然マリンが割って入った。

『仕方ないじゃないの！リサさん、諦めましょう！』

『だって暇じゃねえか！』

『あたしが遊んであげます！』

女神だ！マリンよ！！

こうして危うく人形を連れて行く危機から逃れた……はずだった。

桃色いちご

「じゃ、行ってくるね。8時には帰るから」

「あなた、今日の晩御飯は何がいい？」

「何でもいいよ。夏樹は？」

「あたしはオムライスう〜」

「うげっ…また難しいものを…」

「え〜っ。いいじゃん！卵ぐらいキレイに巻いてねママ」

俺は愛する家族の微笑ましいやりとりを見て、家を出た。

「おはよう」

会社に着くと、同僚の佐藤が俺に行った。

「おはよう」

彼は有名大学卒業のエリート社員なのだが、そういう雰囲気を全然感じさせない気さくでいい奴だ。みんなからも圧倒的な支持がある。俺の会社は出版社だ。海外にも支部があるデカい会社だ。

「あ、そうだ茨木。部長が探してたよ」

「ありがとう」

俺はそう言われて部長のところへ行く。

「よう！」

「おはようございます、部長」

部長…肩書きは堅苦しいが、うちの部長は…スキンヘッドにサングラス、アロハをこよなく愛する男だ。何故部長になれたのか…謎だ。「君に担当してほしい作家がいたりするんだよん。もちろん引き受けてくれるよねん？」

部長…甘えないで下さい。

「そのアロハ、最高ですね」

「わかるう？ニューモデルなんだよお。今年のトレンドはな、大き

めの花のアクセントで…」

部長は嬉しそうにアロハの説明を始める。チャンス！

「そうですか。では私は仕事に戻りますので」

「はいはい」

やった！俺は回れ右をする。

「…いやいや待って待って！話まだ終わってねえじゃんか！」

…あゝあゝ失敗した。

「君に新しく担当してほしい作家さんはな、女性作家でな、桃色いちごさんというんだ」

…すげー作家名だな。

「なんで私に？」

「なんとなくさ〜！しつかり者の君と変な名前の作家とか、おもしろいじゃないか〜！あはははは〜」

このクソ部長…！

「じゃ、この住所に14時に頼むね」

俺は部長からメモを受け取った。

「シヨッキングピンクの外壁の家らしいから、きつとすぐわかるさうわー…」。

ピンポン

14時に桃色いちごを訪ねた。1度も迷うことはなかった。…本当に外壁がシヨッキングピンクだったから。屋根やドアや窓枠は真っ赤。派手すぎるだろ。しかも表札にMOMOIROって…アホだろこの作家。

「はい」

インターホンに若い女が出る。

「出版社の茨木です」

「ああ！雅樹ちゃんね？聞いてるわ。今開けるわね〜」
うわーなんか会いたくねえ…。

俺はロツクが解除された門から中に入る。小さな庭にはバラがいっぱいだ…。もう俺絶対この作家と合わないの目に見えてるって…。

「雅樹ちゃん勝手に入って〜」

家の中からいちごがそう言った。俺は勝手に玄関に入り靴を脱いだ。家の中は白と金を基調としたオリエンタルなインテリアだ。家は大きいわけじゃないけど金持ちか？

「いらっしやーい。こっちよ」

俺は声がる方へ向かう。そして絶句。

「こんにちは、雅樹ちゃん」

「……こんにちは」

原稿やら資料やらで雑然とした部屋に、腰までのストレートな黒髪のロリータ女がいた。そして極めつけは…その部屋にはたくさんの人形…。

「よろしくねっ」

俺、卒倒しそっだよ…

いちごの花園

「雅樹ちゃん顔色が悪いわね。お紅茶でも淹れましょうか？」

「いえ…お構いなく」

「あっそう。せっかく私のスペシャルブレンドのエクセレントティ
ーを淹れて差し上げようかと思ったのに」

…何だよそれ！

「あの…この人形は」

「私ね、リサちゃん人形大好きなのよ。リサちゃんでしょ、マリ
ンちゃんでしょ、アヤカちゃんでしょ、それからマロンちゃんに…」

「失礼ですが、おいくつなんですか？」

俺は頭の痛くなるいちごの言葉を遮って、訊いてみた。

「あら、雅樹ちゃん私に興味があるの？」

そういうわけじゃないけど…

「ええ、まあ」

「いくつに見える？」

マジでわかんねえよロリータ女。

「わかりません…」

「ふふふつ。16よ」

えー！！

「若っ！」

「15の時から小説を書いているの」

「…ご両親は」

「いないわ。私は小さい頃イギリスの孤児院にいて、たまたま観光
に来たここに住んでた老人夫婦の養子になったの。ふたりとも一昨
年と去年にそれぞれ亡くなったけどね」

なんかすげえ人生だな…。

「では、この家などはその夫妻の趣味で？」

「いいえ、死後に私が塗り替えました」

「うわー…。」

「ねえ、私の小説を読んだ？」

「いいえ、まだ…。今日突然担当を発表されました」

「ふうん。また読んでみてね。いっぱいベストセラーになってるから」

「そうなんだ…知らなかった。物書き歴1年で…すごいな。」

「最近までアメリカに赴任していたので知りませんでした」

「へ〜」

「今日帰りに本屋へ立ち寄ってみます」

「買ってね」

「はい」

そう言う少女は純粹なあどけない笑顔を見せた。なかなか可愛いじゃねえか。

「あ、そうだ。雅樹ちゃん、敬語は使わないで。堅苦しいのはイヤだから」

「あ…うん」

「つてか雅樹ちゃん、なんで前の担当ちゃんが辞めたか知ってる？」

「いや…」

「そう言えばそうだ…」

「ふふふ…っ」

えー…聞きたくないかも…。

「私の美貌にストレスを感じたからよ！オホホホ」

何じゃそりゃ…

「ベストセラー作家でブログ女王の私が眩しすぎたんですって。」

へ〜、ブログ女王なんだこの人…

その後、俺は用件を済まし、帰宅の路についた。自宅の最寄り駅で本屋に立ち寄った。

「え〜っと…桃色いちご…」

俺は作家名を目で辿る。すると発見。

『ロリータ物語』

『ベネチアの薔薇』

『桃色両想い』

『長靴を履いた尊』

…すみません、どれも読みたくありません。でもとりあえず1冊手に取ってみる。

『ベネチアの薔薇』

適当にページを開けてみる。

『…マリー・アントワネットは、自分の団子鼻がコンプレックスであった。そこへ現れたのは、同じく団子鼻のフォルゼン伯爵。ふたりは深く愛し合っていた…』

…ふーん…。

また適当なページを開けてみる。

『…その時、アンドラが敵陣に撃たれた。』

「アンドラー！」

「オスカラ！どこだー！？」

「アンドラ…見えていないのか…なぜ…」

「…オスカラ…」

アンドラはオスカラへ手を伸ばした。

「アンドラ…逝くな…私を置いて逝くな…！」

「オスカラ…愛している…」

「アンドラ…」

アンドラは目が見えていない為か、オスカラに向かって手を漂わせ
る。

「アンドラ…見えていないのか…なぜ…なぜ戦場で目隠しプレイを
ー！！？」

『

…アホだろ。

俺は無言のまま小説を本棚に戻した。

今度は帰ってパソコンを立ち上げてみた。

『桃色いちご』

検索してみる。するとすぐにブログが見つかった。クリックしてみ
る。

『今日は新しい担当さんが来ました。名前はMASAKIちゃん。
出版社の人ってむさ苦しい人だと思ってたら、若くて男前でびっく
りしちゃった。エヘッ』

何故かインターホンを押している俺の顔写真が載っている。…あの
クソ女…インターホンの中に隠しカメラを…！！

俺、日本に帰って来ちゃいけなかったのかな…。

47位!! (前書き)

皆様、本当にありがとうございます!

47位!!

『オイ！ハゲ！聞け！聞くんた！！』

俺は鼻の穴に腕をつっこまれて目を覚ました。俺は休みで、リビングのソファでうたた寝していたところだった。ちなみに妻と娘はまたしても外出中。

「…オイ、鼻の穴はねえだろうよ」

『細かいことは気にすんなやハゲ！』

「だ〜から…俺ハゲてねえの…」

『雅樹さん、大変なんですよ！』

「ああ？」

マリンがソファの前の机の上に座って言う。このふたり、食事をする机には自力で上がれないのだが、この応接の机なら協力して上がることができる。

「何が大変なの？」

『この小説、コメディのランキングで、50位以内にランクインされたんですよ！』

「え?!」

『現在47位だ』

「マジで？」

『ああ、マジだ。お前の人形オタクも徐々に有名になりつつあるぞ』

『いや…それはちょっと…ね…』

『ほら、雅樹よ。土下座して読者の皆様に礼を言え！』
土下座ですか?!

『リサさん、土下座はやりすぎです』

『そうか?』

プルルル…

おっ、電話だ。…いや、ファックスのようだ。

「え〜っと…あ、桃色いちごからだ」

『読者の皆様、桃色いちごです。この度コメディで47位にランクインされたんですって？私の美貌のお陰ねっ！これからもどんどんファンレター待ってるわね。愛を込めて。桃色いちご』

…だつてさ。

ブルルルル…

おっ、今度は電話だ。

「もしもし、あなた？あたしよ」

華夏美だ。

「47位にランクインですって？凄じやないの！あたしのお陰ね！」

お前も自信過剰かよ！

「パパあ？」

電話が夏樹に替わられたらしい。

「ああ。パパだよ」

「47位って何？」

「…ああ…大人の事情だ」

「何よそれっ！パパのバカ！」

だつて説明すんの面倒なんだもん…。

「あ、あなた？それじゃ、あたしたちもうすぐ帰るから」

「ああ、わかった」

…なんで俺以外のみんなはランキングとか知ってるの？

「ま、そういうことだからさ、お前ら。そろそろ帰ってくるらしい

から夏樹の部屋に行ってる」

『はいよ』

皆様、本当にありがとうございます。47位、嬉しいです。これからも頑張りますね。

「パパ〜！」

「ただいま〜」

あ、愛する家族が帰って参りました。蜜柑も玄関に走って行きました。

「パパ、見て！ジュリアよ！」

…ジュリア？

ああ…今日ほめでたいはずだったのに……また人形が増えた…。

魔女、来たる

「おはよう雅樹ちゃん。お紅茶はいかが？」

「…お構いなく」

俺はいちごのエクセレントティーを断つて、椅子を拝借した。

「で、なんで俺呼んだの？」

「暇だったから」

「友達とか呼べばいいじゃん」

「学校行つてないから友達いないの。つてか人形が友達」

「あつそう…」

そう、俺は今日、突然呼ばれてきたのである。

「つていうか、俺ケイタイのアドレスとか番号とか教えた記憶がないんだけど？」

「…ふふふつ。私にわからないことなどないわよ雅樹ちゃん」

「……。」

部長…俺ダメつす…。

「夏樹ちゃんと華夏美ちゃんは元気？」

「うん。今朝も目玉焼きを失敗して夏樹に笑われてたよ」

「華夏美ちゃん料理下手くそだもんねえ」

…待て。

「…なんで家族のことを？」

「しつこいわね雅樹ちゃん。私にわからないことなどないのよ？」

魔女だ！

「今度お宅にお邪魔してもいい？私のスペシャルブレンドの茶葉をお持ちしますわ」

「いや…来なくていいよ」

「なんで？」

だって…キャラ的にうちに溶け込むタイプっぽいもん…。

「そう言えば、夏樹ちゃんもリサちゃん人形を持ってるのよね？」

どこまで我が家の内情を知っているんだ…！

「まあね…」

「最近新たに3体になったとか」

魔女め…。

「話が合いそうだなあ。しゃぶしゃぶとか用意して招待してよ」

「そんな豪勢な晩御飯を他人の君になど…」

「雅樹ちゃん！」

いちごを見ると目に涙を溜めている。

「うわわわわ！泣くなよ！」

「だって…だって…両親もいなくて…友達もいなくて…そんな私が鍋料理を囲むことなんて…できると思う？そんな小さな願いすら叶わないなんて…ああ…」

「…わかつたから」

「決まりねっ！」

…数日後…

「ただいま」

俺はいつものように玄関のドアを開ける。

「おかえりパパ」

夏樹と蜜柑が玄関まで迎えに来た。俺はふたりの頭を撫でながら家に入る。台所では華夏美がエプロンをつけて俺に微笑みを向ける。なんて温かい家庭だろう。

「おかえり雅樹ちゃん！」

「…ただいま」

どうしてリビングにいちごがいるのかな？

「パパあ」

「ん？」

「あたし、いちごちゃん大好き！」

うわあ…あの魔女…娘に魔法かけたな…!!

「あなた、今日は豪華にしゃぶしゃぶよ」

お前もか華夏美ー!!

「美味しいです、華夏美ちゃん!こんなに美味しいしゃぶしゃぶを食べたのは一人暮らしになってから初めてです」

「ま〜!」

いちご、ダメだ。華夏美は料理を誉められると有頂天に…。

「いちごちゃん、今度は何が食べたい？」

「サーロインステーキかな!」

「任せる!!」

あー…また来るんだね…いちごさん…。

腹も膨らんで、俺はソファで新聞を読み、華夏美は後片付け、魔女と夏樹は床で蜜柑と遊んでいる。

「私も犬飼おうかな」

「でも一人暮らしでお世話大変じゃないの？」

「だよね〜」

「うちに蜜柑がいるからまた遊びに来たらいいじゃん!」

「だよね〜!」

いやいや…エンジェル係数上がるからもう来るなよ…。

「それにいちごちゃんにはたくさん人形がいるでしょ？」

「うん」

「今度遊びに行かせてね！」

「いいわよ」

うわぁ…夏樹絶対あの家気に入るぜ…

「あたしがもう使わなくなったカチューシャとかリボンとかもあげるわよ。リサちゃんの服もいらないのあげるわ」

「やったぁ！」

うちの娘を釣るな！！

「あたし、いちごちゃんみたいなお姉ちゃんが欲しかったなぁ」

「私も、夏樹ちゃんみたいなお姉ちゃんが欲しかったなぁ」

何じゃそりゃ…！それを言うなら妹だろう！

俺を取り巻くロリータ女たち

華夏美は隣の奥さんとまたバーゲンに、夏樹は公園に…俺は奴らと家に…ううっ…。

『暇だなくマリリン…』

『え？そう？』

マリリンは蜜柑を撫で回しながら言った。

『お前は犬オタクだから暇じゃねえか』

『うん』

『ジュリアは暇だよなあ？』

『まあね。でもやっとボックスから解放されて、こつやって普通に会話もできるだけでハッピーだな』

会話される俺は不幸せです。

『まあな。あの箱マジできついよな。手足も首も針金で固定されているしな』

『うん』

ジュリアは、他のふたりと違って西洋美人だ。背も一番高く、色白のふたりとは違い、小麦色の肌がかっこいい。髪はリサと同じブロードだが、リサのストレートヘアとは対照的にパーマがかかっている。そして口調にやたらとカタカナが多い。まあ…服装は予想できるでしょ？3人ともゴスロリなんだよね…。

『ところでどうしてあたしたちはミスター茨木としか話してはいけないの？』

『それはね、話すとすごく長くなるんですってよ。要するに、雅樹さんが人形オタクだからなんだそうぞ』

マリリン、それは奴のデマだぞ？

『へ〜』

納得すんな！

ブイーン…

おっ、携帯のバイブレーションだ。

「もしもし？」

『雅樹ちゃん』

「ああ…いちご…」

『あのね、助けて！』

「何？」

『新作のネタなんだけどね、どれがいいか自分で決められなくて、箇条書きにしたネタ候補をファックスで送るからちよつと見て！』

「自分で決めるよ」

『雅樹ちゃん！私を見捨てるのねっ！？』

「違うよ。俺には君の感性がわかんないんだよ。だから自分で…」

『つべこべ言わずに協力しなさい！じゃないと雅樹ちゃんの過去をブログでバラすわ！』

…怖えええ！！

「わかったよ。今から送って」

『はいよ〜』

その後、A4用紙8枚に渡って送られてきたファックスを見て、俺は愕然とした。

「…字、小さすぎるだろアホおおお！！！！」

ちょっと切ない話

「ねえ、ジュリアちゃん」

『呼び捨てでいいよハニー』

『…おい!』

リサとマリンは顔面蒼白でジュリアを睨む。

『夏樹と喋っちゃダメだろうがボケエエ!』

…はっ!

俺は悪夢から目覚めた。隣には華夏美がスヤスヤと寝息を立てている。なんと縁起の悪い夢なんだよ…。俺は枕元の携帯電話をチエツクする。現在の時刻は午前4時。3時にメールが1件届いていた。

『雅樹ちゃんおはよ〜。いちごだよん。今日は締め切りの日だね。ばっちりできてるから10時に来てね〜。あ、ついでに、人形ちゃん3人とも連れてきてねっ!』

…いや、最後の1文…意味わかんねえ…。

「おはよう。早起きどころかまだ夜だよ?ところでなんで人形なんかいるの?」

返事はすぐに来た。

『この前見た時に、何か不思議なモノを感じたのよねえ。ちょっと気になってね。オホホ』

うわぁ…マジで魔女だよこの人…。

俺はもう一眠りして、いつものように家族との朝の一時を過ごし、普通に出社。

さて、そろそろ悪の拠点いちご城へ行かなきゃいけない。もちろん、カバンの中には奴らが。

もう会社では大変だった。俺の会社を見たいからって出せ出せうるさいの何の…。まあ人形オタクだと思われなくなかったから必死に隠し通したけどね…。

ピンポン

『あ、雅樹ちゃん。入って入って』

インターホンの対応を聞いて俺はいちご城へ入場した。いちごと俺はひと通り業務的な話を済ませ、わけのわからん紅茶ではなく普通の緑茶を頂いた。

『私の本あんまり好きじゃないのね』

『うん。世代も違うしな。人には好き嫌いがあるから』

『そうね。でも新作はぜひ読んでね』

『題名は?』

『細木イチゴのズバリ言われちゃったわよ』

ダサっ！

『あ、そうそう。お人形は?』

『ああ…』

俺は鞆から3体を取り出し机に並べた。いちごは3体に愛らしい笑顔で話し掛ける。

『こんにちは、桃色いちごです』

横たわったロリータ3体はもちろん無言。

『こんにちは、私、小説家やっています』
相変わらず3体は営業スマイル。

『…わかってるのよ、茶化すんじゃない。燃やしてしまうわよ?』

愛らしい笑顔のままそう言われると、3体は突然素早く正座した。

『こんにちは!』

うわあ、リサが真面目だぜ!つてかこの女…魔女だ絶対!

『みんなそんなに固くならないで。足、崩してね。遠慮なくくつろいでよ』

『はい、ミス桃色』

ジユリアがそう言いながら長い脚を伸ばす。それをチラツと見てリサがあぐらをかく。マリンはいつも正座だから崩さないけど。

『私、幼い頃からずっと夢だった。こうやって人形とお話するの』

『そうなんですか?』

『うん。ここにいる人形は誰も喋らないから』

『まあな。大抵の奴は話さねえからな』

『どうして?』

いちごがそう訊くと、3体はしばらく黙り込んだ。やがてリサが切り出した。

『あたしたち人形は、みんな人間の生まれ変わりなんだ。誰もが魂を持つてる。だが、人形に生まれ変わる奴は、みんな人生を諦めた奴なんだ。人間界に悩み、人間を諦めた奴。だから人間に関わろうとしねえ。たとえもし関わったとしても、歳を取らない人形はその人間を見送ることになる。そんなことなら、人形に徹して、人間に飽きられればリサイクル。その方が楽さ』

『…悲しいね…でもあなたたちは私や雅樹ちゃんと話すわ?』

『あたしたちは人間を諦めたわけじゃないからな』

リサがそう言いながら鼻で笑う。

「？」

「死者の数って、物凄いでしょ。だからたまに間違えるんですよ、神様の秘書が。秘書が間違った書類を神様に提出、神様は気付かず印鑑をポン！それであたしたちはお人形です」

マリンもそう言いながらクスツと笑う。

「髪が伸びるドールとか、本当の人間のような顔立ちで長年人々を魅了するドールとか、そういう人間っぽいやつはあたしたちみたいな奴ら」

ジュリアもそう言いながら笑う。

「人形も複雑なのね」

いちごは部屋に飾られている人形を見回す。

「私、人形が好き」

そう言ういちごを見て、3体は嬉しそうに微笑む。その顔は本当に幸せそうで、営業スマイルで飾られている人形も、どこか嬉しそうに見えた。

…ヤバイ…俺、人形キライになれねえ…っ！！

立場の弱い俺

最近うちの3バカには趣味があります。

『あ、もしもしい？ミス桃色？』

いちごとの電話です。

『今何してるの？』

『ブログ更新よ、ジュリアちゃん』

机の上に立てた受話器に、3人で寄り添って会話する。

『ねえ、ふと気になったんですけど、桃色いちごって本名ですか？』

『うっん』

『本名は？』

『本名はね、……………よ』

あれ？沈黙が…？

「どうした？」

突如黙り込んだ3人に訊いた。3人は顔面蒼白で立ち尽くしている。俺はテレビを見ていて会話の内容はちゃんと聞いていなかったの、よくわからない。

『……………いや…本名があまりにもダサくて……………』

リサがそう言った。

「何なの？本名」

『それは…いちごの名誉に関わるから秘密だ』

あーそんなにダサいの…。だからって桃色いちごも凄いネーミングだけ…。

『あ、みんな。私そろそろ仕事に戻るわ』
『…ああ。じゃ、またね』

3人は電話を終え、改めてソファの方のテーブルにくつろいだ。

『ダサかったわ〜本名。焦るわ』

『あのルックスからは想像できないよね』

『うん』

ちよつと聞きたかったなあ本名。

『…暇だし、しりとりでもしねえ？』

『いいですよ。雅樹さんも参加してね』

おっ、しりとりすんのか。まあいいよ。順番は、リサ・マリリン・ジ

ユリア・俺。

『じゃ、あたしからな。しりとり』

『リンゴ』

『ごま塩』

『音楽』

『…挫けるな！お前はまだ行ける！』

『ルンルン 今日天気がよくて気持ちいいですね！』

『眠るなー！眠ったら死ぬぞー！！』

…え、俺の番なの…？

『ぞ…象』

『恨むなよ、仕方がなかったんだ…』

どういうシチュエーションだよ。

『段々寒くなってきましたわね〜』

そうですか。

『猫の額ほどの広さのミスター茨木の家』

うるさいわボケ！

まあそれから俺はこんな感じのしりとりで2時間ほど付き合ひ、
へ

トヘトに疲れてしまいました。アホに付き合つのは楽しやねえ。

ピンポン

あ、誰か来た。

『雅樹ちゃん』

…魔女だ。

『開けて〜。晩御飯食べに来たよ〜』

俺は渋い顔でドアを開ける。

「そんな突然来ても飯はごさいません」

『大丈夫よ。華夏美ちゃんに前もってメールしてあるから』

そう言いニツコリ笑うロリータ女は、スルリと家に入って行った。

『みんな〜遊びに来たあ!』

『おう!いちご!』

リビングの方から3人の黄色い声が聞こえる。俺は無言のまま玄関のドアを閉め、重い足取りで部屋に戻った。

ロリータ服がいっぱい！

「パパあ？」

「ん？」

「いちごちゃんのお家にはいつ連れていってくれるの？」

「……。」

…そんなこんなで俺はせっかくの休みを返上していちご城へ来ています。可愛い我が子のためだ…。

『夏樹ちゃん、飲み物は何がいい？』

いちごがキッチンから俺たちがいるリビングに呼びかける。

「ん〜？」

夏樹は答えられないでソファーに座ったまま首を傾げている。

『おいで〜』

夏樹はそう言われてキッチンへ走って行った。キッチンから楽しそうなふたりの声が聞こえる。

「うわ〜いちごちゃんの食器はみんなかわいいね！お鍋とかも全部かわいいし！」

『可愛いでしょ？可愛くないやつは割ってやったわオホホホ』

「へ〜」

…真似するなよ？

『…あのね、これは緑茶、こっちはココア、それからコーヒー、冷蔵庫に牛乳、カルピス…あ！私のオススメはね、私のオリジナルブレンドのお紅茶よ！』

「それって甘い？」

『甘いつていうか…うーん…ミラクルな味よ』

「じゃあそれ！」

夏樹、お前意味わかってねえだろ。

『雅樹ちゃんは〜？』

「…緑茶で」

『ジジくさっ!』

じゃかあしいわ小娘!

しばらくするとふたりがキッチンから戻ってきた。夏樹が俺の前に花柄の湯呑みを置く。ふたりの手にはお揃いのウサギのマグカップ。
「夏樹、ひとくちだけちょうだい」

「え〜」

娘よ、わかれ。別に飲みたくはないんだ。お前のために毒味をしてやるんだよ。

俺はエクセレントティーを口に運ぶ。

「!?!?」

『美味しいでしょ?』

「ああ…驚いた…ミラクルだな」

マジで美味いんだけど!今までの人生で味わったことのないタイプの美味だ!

『初めから遠慮せずに飲んでみたらよかったのに〜』

「すいません」

謝るしかねえな、こりゃ。美味いわ…。

「いちごちゃん、何が入ってるの?」

『ふふふっ。秘密よ。私が死ぬときに夏樹ちゃんにレシピを遺言してあげるわね』

「ゆいごくん?」

『そうそう。ま、そのうち意味わかるわよ。隠し味だけ教えてあげるとね…それは愛よ!オホホホ!』

はいはい…。

『あ、夏樹ちゃん。この前言ってた人形の服、あげるわね』

いちごはそう言い席を立った。そして2階へ上がって行った。10分くらい経って、いちごは小振りなダンボール箱を持ってきた。俺たち親子は、テーブルの上に置かれたその箱の中を覗く。

「うわあー!!」

中にはロリータ服がてんこ盛り入っていた。夏樹の目が輝く。「型が古いし、何のブランドでもないお洋服なのよ。今はもう、流行のものや、ブランドもの、限定品ばかり着せてるから」

あんな小説で何故そんなにド金持ち?!

「ありがとう!いちごちゃん大好き!」

『どういたしまして』

帰宅してから3時間、着せ替えごっこだったのは言うまでもない。

『雅樹!もうロリータはイヤだ!!』

『雅樹さん、目まぐるしく着替えさせ続けられるとしんどいですね』

『!』

『何着か、外人タイプのあたしには、ヒップが見えるくらい短いんだけど!』

各個人の悩みはそれぞれだな…。

17位!!

皆様、わたくし作者は今、手が震えています。なぜならこの度コメデイでのランキングが…

…うわああああ…!

皆さんこんにちは。雅樹です。しゃしゃり出てきた作者はちゃんと殴っておきました。女だろぅが関係ありません。作者が作品に出てくるなど、言語道断です。そもそもこの小説は俺のナレーターがあつてこそ成り立って…

…ぎゃあああああ…!

『読者のみんな！リサです！ハゲは黙らせておきましたのでご安心下さいませ』

「お前！鼻の穴は反則だつて前にも言つただろぅが！お前の腕はは細いから痛いんだよ！」

『わかつたから、早く鼻血どつにかしたら？その辺汚したら華夏美ちゃん悲しむぜ』

「違つんだ〜！俺は読者に伝えることが…！」

『うつせえ！マリリンがちゃんとやってくれるさ。なあ？』

『……皆さん、こんにちは。マリリンです。この度、コメデイのランキングで17位にランクインされました。まだ連載を始めて1週間と経っていないのに、ここまで皆さんの支持が得られたことを大変幸せに思います。それにしてもこんな小説にお越し下さるなんて皆さん物好きですね…はっ！今あたし失礼なこと言いましたか？すみません！とにもかくにも、これからも頑張ります…!』

「俺がな！」

『は？頑張るのはあたしだけ？』

『いいえ！頑張るのは私よ雅樹ちゃん！』

「お前どつから湧いてきたー！？」

『うふふふつ。私に不可能などないわっ！』

「いや：お前：玄関の鍵ぶつ壊してんじゃねえか！どうしてくれるんだよ！！」

『バカね、雅樹ちゃん。修理屋さんを呼べばいいじゃない』

「壊したのはお前だろ？！」

『もうつ。雅樹ちゃん。鼻血出しながら怒られても全然恐くないわよ？むしろおもしろいわオホオホ！』

「…殺す…お前ら殺す……」

『…こういう時に一番冷静でクールなのはあたしね。今の状況を説明するとね、ミスター茨木がミス桃色を追いかけ回し、リサは鼻の穴に突っ込んだ腕を洗っていて、マリンは蜜柑の背中に乗ってミスター茨木とミス桃色の大乱闘にアタフタしてるって感じね。そしてあたしは安全な食器棚の中から実況しております。せっかくめでたい報告だったのにめっちゃめっちゃね。オーマイガー』

「パパあ！蜜柑！ただいま！」

「…あなた！この部屋は何？！」

『華夏美ちゃん、ごめんなさい。雅樹ちゃんが大暴れしてたのよ。』

「誰のせいだよ！！」

「あなた、とりあえず鼻血を何とかして！いちごちゃんは部屋を片付けて！」

『え〜！私が片付けるの？』

「誰であろうとあたしのうちを汚す奴は許さん！片付けなかったら今後ごはんは作ってあげません！」

『鬼だ〜！』

こうして、17位になったためでたい日は過ぎていったのである…。

避暑地にて〜その1〜（前書き）

避暑地に家族旅行！ ほのぼのゆったりリラックスな皆さんです。

避暑地にてその1

「あなた？」

「ん？」

寢室のベッドの上で、隣に横たわる麗しき妻が俺に話しかけてきた。

「会社、連休取れないかしら」

「取れないこともないけど、どうして？」

「夏の思い出に、旅行なんてどうかと思って」

「家族で？」

「そうよ。いちごちゃんも一緒に」

「…あいつ家族じゃないよ？」

「家族も同然よ。可愛いしいいじゃないの」

えー…。

と、いうわけで俺たちは家族(?)旅行をすることになりました。
車で避暑地の山へ行きます。

『どうしよう！楽しすぎるわ夏樹ちゃん！』

「いちごちゃん、まだ車の中だよ。しかも高速道路だよ？」

『でも楽しいわ！ ありがとう、連れてきてくれて』

車の後部座席には、右から順に、チャイルドシートの夏樹、いちご、
何故かちゃんとか3バカ。助手席には妻と、彼女に抱かれた蜜柑。

『雅樹、楽しいぜ』

『楽しいです』

『あたしも』

まあ、そんなに楽しんでくれてるなら、3バカが一緒でもいいや。

『雅樹ちゃん、どんなところに行くの?』

「山の中のロッジだよ。小さな村の集落みたいに、家族ごとかでコテージに泊まるんだ」

『じゃあ、至れり尽くせりのお料理が出たり、温泉の大浴場があったりっていうタイプの旅行じゃないのね?』

「ああ。自然と戯れるタイプの旅行です」

『まあ!』

「川で遊んだり、夜は外でバーベキューだし、いくつかのコテージで集まってキャンプファイヤーもあるし、早朝にはカブトムシとかを取りに行ったりね」

『楽しそうね!』

「だろ?」

『あたし、一応ジーンズとTシャツ持って来たのよ。よかったわ。こんなフリフリじゃ大変なものね』

あ、そういう服も持ってるんだ。

『でもおばあちゃんのなんだけど…サイズ大丈夫かしら』
遺品かよ!!

…数時間後…

『着いたね〜! 涼しいね! そして山だね夏樹ちゃん!』

「山だね〜!」

どういう感想だよ。

「さあ、荷物持って降りるから手伝え」

『え〜! もうちょっと都会の喧騒から遠のいた雰囲気味わおう!』

「…働かざる者、食うべからず」

『何を運べばいいんですか?』

俺たちは豊かな森の中に佇むちいさなログハウスへの玄関前へ、車から荷物を運んでいく。

「あ、見て。いちごちゃん、あそこに可愛い鳥がいるっ!」
夏樹が木の上を指して言う。

『まあホントね。夏樹ちゃんは焼き鳥好き?』

…え。

「あなた〜、あたしは本部にチェックインして鍵を貰ってくるわ〜」
「ありがとう」

華夏美はそう言って走り去った。その後ろ姿はまだまだイケてるぜ、華夏美よ。

俺たちはそれから夕刻前までそれぞれでくつろいだ。

俺は蚊取り線香を焚いたラウンジで読者をしていた。俺の座る木製のリクライニングチェアの隣で、蜜柑も寝息を立てていた。蜜柑に寄り添うようにして3人も羽を伸ばす。都会よりもかなり涼しいし、自然の音が心地いい。

華夏美は、着替えたいちごと夏樹を連れて、近くの小川へ散策に行った。そう言えば、いちごの育ての親のおばあちゃん、若い頃スタイルよかったのな。

『いいな〜。こんな所に住みたえな〜』

『あたしも。前世のモデル業もずっと都会暮らしだったしね』

『あたし、幸せです』

楽しそうだなあ。

「もう少ししたらバーベキューの準備に取りかかって、その後はキャンプファイヤーの集場所に行って、カブトムシの罠を仕掛けに行つて…」

『おお、楽しい企画が盛りたくさんだな!』

『…？ 雅樹さん、寝てますね』

『ハゲ、ずっと運転してきたしなあ』

『ミス茨木が帰ってくるまでそっとしておきましょ』

避暑地にて～その1～（後書き）

次回に続きます

遊書地にてそのそ（前書）

前回の続きです

避暑地にてその二

「夏樹、いっぱい食べなさい」

華夏美が夏樹にそう言った。俺たちは今、バーベキュー場でバーベキューをしています。蜜柑はお留守番。

「うん、いっぱい食べる〜」

俺たちの他にも、バーベキュー場にはたくさん家族やグループがいた。早くも出来上がっている人もいる。

「あ！」

突然、夏樹が声を上げた。

「どうした？」

「杏ちゃんだ！」

夏樹はそう言うのと、箸と皿を持ったまま走り出した。「こら！置いて行きなさい」

「そうよ！ 肉を返して！」

…華夏美さん、何か違います。

少し待っていると、とある家族がこちらに近づいてきた。

「こんばんは〜！ こんなところで会うなんて！」

「あら、岡本さん！」

「知り合い？」

「ええ。夏樹のお友達のご家族よ」

子供の顔を見て思い出した。何度かうちにも遊びにきたことがある。

「いつも夏樹がお世話になっております」

「あら、夏樹ちゃんのお父さん？うちの旦那より男前ね〜！」

「…どうも」

奥さん…旦那さん横で目を潤ましていますよ？

「ところで茨木さん、そちらのお嬢さんは？」

岡本夫人が俺に尋ねた。

「友人です」

『桃色いちごです』

「まあ!!!」

その名前を聞いて岡本夫妻は絶句。

「握手してちょうだい！ ロリータじゃないからわからなかったわ！」

『こういう場ではああいうお洋服は不向きかな〜って』

…あれ？なんか周囲がさっきよりザワザワしてきた？ しかもやたら俺たち家族の方見てる…？

「…桃色いちご？」

「マジかよ!」

「え! どこどこ？」

あ…そっか。こいつ何気に有名人なんだった…。忘れてたよ。

『雅樹ちゃん：私、部屋に戻った方がいいかしら？』

「いや、いいんじゃないか？ 気にすんなよ」

俺たちは何食わぬ顔でバーベキューを再開した。

「じゃ、私たちも戻るわ。またキャンプファイヤーで会いましょうね」

岡本一家も自分たちの場所のバーベキューへ戻って行った。その後もしばらくはザワザワや視線は感じたが、みんなプライベートだから気を遣ってか、俺たちに寄ってくることはなかった。

「パパあ、いちごちゃんは凄い人なの？」

「まあね」

「ふ〜ん」

俺たちは協力して後片付けをしてキャンプファイヤーの場所へ移動

した。櫓を囲んで既に大きな円ができていた。俺たちも輪の中に入れてもらう。するとこのオーナーが来て、櫓に火をつけた。段々炎が大きくなる。

「凄いね〜っ！」

夏樹の目はキラキラ輝いている。

『ミラクルね〜』

おお、いちごも楽しそうだな。

『みなさ〜ん！ 今からビンゴ大会をやりま〜す！ カードを配ります！』

オーナーがビンゴを配り始めた。

『商品は、オオクワガタの幼虫、ペア温泉宿泊券、ワイン、などなど！ 頑張つて下さい！』

『やるぜ〜雅樹ちゃん！ 燃えるわねっ！』

そうですか。

『では最初は〜…62！ 62です！』

ビンゴは楽しく進んでいった。

「あっ！ 見て〜あたしリーチ！」

華夏美に手伝ってもらいながらの夏樹がリーチになったらしい。

『ふふふふ。私はダブルリーチよ、夏樹ちゃん』

『次の数字は…8！』

『あのハゲー！ トリプルリーチになっただけじゃん！』

いちご！オーナーまだハゲてないよ！

『次35じゃなかったら殺すわ！』

「えっ！」

夏樹、きつと冗談だから大丈夫だよ。

『次は…38！』

『きよええええええ！』

…ヤバい！目がイツてる！！

そんなこんなで俺たちは何の商品もゲットできずに終わりました。

それから歌を歌ったり、オーナーによる星座講座を聞いたり、楽しい夜は過ぎていきました。

それから俺たちは部屋への帰り道に、カブトムシの蜜を仕掛けて帰った。

（翌朝）

俺たちは元気に昨夜の仕掛けに向かいました。

「…あ！」

夏樹がカブトムシを発見した。

『雅樹ちゃん！ バッチリだわ！』

仕掛けには大きなオスのカブトムシが掛かっている。

『どんな味なの?!』

…食べないよ？

「パパあ、おつきいね〜」

俺は目をキラキラさせている夏樹に、カブトムシを取って見せた。

「あたしも触る〜！」

『私も握る〜!』

…やめて下さい。

俺たちの夏の休日は、そうして幕を閉じました。

ちなみに、余談ですが、帰りの車の中は、俺と人形以外、全員爆睡でした…。

巻き貝と女王蜂

『…と、まあ。そういうコンセプトでいこうと思ってるわけなのよ』
「なるほど」

俺は今日は仕事としていちご城に來ています。ちなみに、こういう時は毎回3バカも一緒です。

ピンポン

あら、來客です。いちごがモニターを見ながら受話器を取る。

『おはよ〜。入って入って〜』

いちごがそう言うのと客が玄関のドアを開ける音が聞こえた。そして数歩の足跡の後、メガネをかけた痩せた男が姿を現した。ガリ勉つて感じの見た目で…いや、オタクつて感じかも…。

『雅樹ちゃん、紹介するね。巻き貝ちゃんよ』

「…はあ」

「ど、どどどどうも！ 僕、あの…えーっと…お会いできて光栄ですー！」

挙動不審かよ！

『いちご、まさか彼氏かよ？』

『いやだわ、リサちゃん。だったら雅樹ちゃん妬いてくれるかしら？ ふふふっ』

アホか…。

「あ、もしかして、MASAKIちゃんですか？ ブログによく登場しますよね」

「ああ、まあ」

ってかなんで俺、ブログではローマ字表記なの？

「確かに整った顔してますね〜」

「…どうも」

……。『ってか何なんですか？ 巻き貝って』

『ああ、ハンドルネームだよマリンちゃん。私のブログに度々コメントしてくれてるファンだったんだけどね、私のリサーチにより近所に住んでることが判明してさ、パシリに使用してるのよ』

「そういうことなんですよ。あははは」

……ふーん……。

『で、今日のお使いはこれね。お願いね』

いちごはそう言って巻き貝にメモを渡した。

「行ってきます」

そう言う巻き貝に、いちごはヒラヒラと手を振った。

『さて、仕事の話の続きよ』

「……ああいうパシリってまだいるの？」

『うん。みんな交代で私の面倒見てくれてるからね。女王蜂ちゃんとかおたまじゃくしちゃんとかユーラシア大陸ちゃんとか、色々ね』
『いいな〜。あたしもパシリ欲しいな〜』

おい、リサ。お前既に結構俺をパシってるぜ？

『あたしがまだ女頭だった頃は、数えきれんほどのパシリがいたんだけどなあ』

じゃかあしいわロリータ女。

『あたしもモデルだった頃は、あらゆるメンズにアプローチされて……楽しかったなあ』

モテたんですね、ジユリアさん。

『でもね、安心してよ、雅樹ちゃん。私が愛しているのは雅樹ちゃんだけよっ』

………は？

『さっ、仕事仕事〜』

……。

『いちごさん、ちょっと読ませて〜』

マリンがいちごのパソコンへ近づぐ。

『いいわよ〜』

『新作ですか?』

『ええ。体中がゴムのような主人公と、足技の得意なコックさん、剣道の達人、天才航海士、オトボケ技術士、などの面白いメンバーで海を旅する話よ』

待て！ 俺、なんか心当たりが…！！

『おもしろそうですね!』

『主人公のネームは何ていうの?』

『うふふ、モンキッキー・C・ルフエよ』

待てー！！

『実はね、執筆中からブログでは大盛り上がりなのよ！ またまたベストセラー間違いナシだわ！ オホホホホ!』

…部長…俺…もうダメだよ…。

ブルルルル…

『あ、電話だわ〜』

いちごが電話へ走って行く。

『は〜い、どなた? …ああ、女王蜂ちゃん! …ふ〜ん、そうなの〜。大変ねえ…まさかあの温厚な弟がねえ……キれる子どもたち…? あら〜大変ねえ……。うん。うん。いいわよ? いらっしやいな。…ああ、エクセレントテイ? ちゃんとあるわよ〜』

えー…また変なキャラクター増えるんだよねー…憂鬱だよ部長…。

『え！ 実はもう家の前にいる?! 入ってらっしやいな〜』

玄関の開く音がして、その後駆け込んでくる足音がした。

「いちごちゃん!」

『まあまあ。大変ねえ。今お茶淹れるわ。座ってて』

駆け込んで来たのは、20代前半であるう女性。真っ黒のライダースーツに身を包み、黒髪を前髪を作らずにお団子にしている。長い手足にびっくりするような美人。手にはセンスのいいヘルメットが

握られている。

「あの…こんにちは、出版社の」

「M A S A K Iちゃんでしょ？ 知ってるわ」

そう言いながら彼女は鼻をすすった。

「あの…あんまり泣かないで下さい。まあ、とりあえず座って下さい」

「ありがとう」

俺は彼女を向かい側のソファに座らせた。いちごがお茶を運んできて彼女の隣に座る。

『女王蜂ちゃん、弟さん、どうしてキレたの？ 高校生でしたっけ』

「そうよ。部屋に入ってね、タンスの中身をチェックしたらね、アンダーウェアはボクサーパンツ派だったのよ。でも、その趣味が悪かったから、全部破棄して新しいのにしてあげたのよ」

『どんなのに？』

「全部ハート柄に」

この美人、どアホだ。そりゃあキレますよ弟さん。

『ひどい弟ねえ』

「でしょ？」

いえ、彼は普通です。

「しかも、何故か両親にも呆れた顔をされたわ。ショックよ」

『理解のない親御さんねえ』

いえ、両親も普通です。

『あ、雅樹ちゃん、紹介が遅れたわね。彼女、ハンドルネーム女王蜂ちゃん。バイクが趣味だから、移動手段として呼びつける子なの。この人あんたより年上だぞ。』

「いちごちゃんを後ろに乗せて運転するとね、いい匂いがするし、太ももにチラチラ当たる服のレースが最高なのよ」

変態か！！

『まあ、ね。とりあえずさ、気晴らしに今日は雅樹ちゃんのお家でサーロインステーキでも食べましょ？』

「はい、そうですね」

話をまとめるな！このエンゲル係数泥棒猫が！

海水浴

『ねえ、雅樹ちゃん。今の季節、行くべきところがあるわ』
我が家でサーロインステーキを頬張るいちごが言った。

「…却下」

『連れて行ってよ!』

「いちごちゃん、どこななの?」

華夏美、余計な助け舟を出すな。

『海水浴よ!』

…絶対夏樹が反応するぜ…。

「ママ! 行こう!」

ああ…決まっちゃったな…。

…と、いうわけで。俺たちは海水浴に来ています。メンバー? 凄
いぜ。意味わかんねえぜ。俺・華夏美・夏樹・いちご・女王蜂・3
バカ・巻き貝。…うわあ。

「あなた、まだまだいい体ね」

華夏美…ありがとう。華夏美はピンク地の花柄模様のビキニです。
白い肌に、色素の薄い茶色がかった髪…君もまだまだイケるぜ…な
んでノロケてみました。

『女王蜂ちゃん、日焼け止め塗って』

「うふふっ、いいよ」

変態っ!!

『優しくしてね』

「うふふふふふふっ」

教育上よくねえからやめろ!!

「俺、日に焼けると真っ赤になって皮剥けて終わるんっすよね…」
男としてなかなか悲しいなあ、巻き貝よ。

「パパあ、早く浮き輪やって」

「はいはい」

夏樹は、淡いピンクのワンピース型の水着を来ています。腰のあたりにミニスカートみたいなプリーツがついています。

『あ、雅樹ちゃん。ついでに私の浮き輪もお願ひしま〜す』

「えー…」

『いいじゃんか!』

いちごは、白地にいちご柄のビキニ。ほとんどのパーツの縁にフリルがついている乙女仕様。

「あたしがやってあげるってば」

『ありがとう! 好きよ女王蜂ちゃん!』

女王蜂は、無地の黒のビキニ。抜けるような白い肌に抜群のスタイル。綺麗な顔にお団子頭。男が群がりそうなのに…いちご大好きだなアಂತア……。

ちなみに、3バカも色違いの無地のビキニ着用です。リサが白、マリンが水色、ジュリアが赤。やっぱりジュリアが一番スタイルいいね。小麦色の肌だし、海が似合うよ。うん。

「…さあ、浮き輪もできたし、行くところか!」

「うひゃあ!」

俺たちは走って海にザブザブ入って行った。……ヤベエ…28歳サラーマン、ちょっと楽しんでます。

華夏美は夏樹について浅瀬で遊ぶ。俺は…

『みんな、あの浮きまで競争よ!』

といういちごに駆り出されました。浮きはまあまあ遠いけど、俺、正直、負ける気がしねえし。

第一コース、いちご。

第二コース、俺。

第三コース、女王蜂。

第四コース、巻き貝。

『よーい…どんっ!』

俺、やはり先頭に。次に僅差で巻き貝がつく。それに並ぶように女王蜂。いちごは…女王蜂より頭二つ分後ろだ。言い出しっぺなんだから頑張れよ。しばらくその位置で接戦が行われる。

「…くはあああ!」

え? 今背後で変な声が…? 振り返ると巻き貝がなくて、替わりに女王蜂が不適な笑みを浮かべていた。

「うふふつ… サバイバル…っ!」

いやあ、意味わかんねえー!!!

「待ちなさいMASAKIちゃん…」

いやあああああ! 浮きまでもうちよつとだ! もうちよつと!…!

「…うふふつ」

「うわあああああ!…ゴボゴボ…」

「さあ、いちごちゃん、行くのよ!」

『うへ〜い! やったあ〜1番だあ!』

…なんとか浜辺に辿り着けた俺と巻き貝は、海水でしょっぱくなつた口の中で呪いの言葉を呟いていた。肩でゼエゼエ息をしていると、ふたりが爽やかな笑顔で戻ってきた。

『私が1番よ!』

殺す……っ!

「俺、ちよつとバテた…休憩するわ」

『オツサンだねえ。女王蜂ちゃんと巻き貝ちゃんはまだ遊ぶよねえ?』

「もちろんよ!」

「喜んで!」

俺は若い奴らを置いてパラソルの下へ戻った。

『よう、楽しそうじゃねえか』

「まあな…」

『あたしたちはあんまり塩水よくないから海水浴はNOだからね。まあ水が基本的によくないからね』

「だろうな」

『帰りの車、毎度の如く、あたしたちと運転手以外みんな寝ちゃうんでしようね』

「…だろうな」

俺は爆睡するみんなの顔を思い浮かべて微笑んだ。

『ミスター茨木、なかなかハッピーそうじゃないの』

「そう?」

『ああ』

『幸せそうですよ』

「そうか」

俺たちは笑い合った。…までは覚えてるが、どうやら俺は寝てしまっていたらしい。

「…あなた? 海の家でごはんはどう? まだ寝る?」

「…ああ…いや、行くよ」

『連れて行けよ』

俺は3バカを持って華夏美の後に続いた。

『私はジャイアント・スペシャル・ブルーハワイね』

「それ、ごはんじゃなくてかき氷だよ?」

『わかってるわよ夏樹ちゃん。お気になさらず〜』

「じゃあ、あたしはカレーにしようかな」

「じゃあ、僕も華夏美さんと同じで」

「俺は枝豆とビールと冷や奴」

「夏樹はねえ、うどん」

「あたしはラーメンで。大盛りで」

俺たちはそれぞれ食事をした。すると離れた席にいた金髪の男が声をかけてきた。

「茨木さ〜ん！」

「…おお！ アンソニーじゃないか！ こっち来いよ〜」

俺の会社のすぐ下の後輩だ。血はアメリカ人だが、生まれも育ちも日本だ。でも英語は流暢だ。

「誰と来てるんだ？」

「弟のジョージと」

「…男ふたりで？」

「兄弟揃って彼女いないんですよ…うう」

「そうかそうか。一緒にどうだ？」

「いいんですか？」

「ああ」俺たちの席にアンソニーとジョージが加わった。

「いや〜先輩。美女ばかりですねえ」

美女：…まあ美女は3名ほどいるはずだが…変な奴だぜ？

「先輩、紹介して下さいよ」

「ああ。妻の華夏美、娘の夏樹、俺が担当させられた作家の桃色いちご、その連れである巻き貝と女王蜂だ」

「…先輩、失礼すけど、後半の方名前おかしくないっすか？」

『私のは気にしないで。本名は永久に秘密よ』

「あたし、本名はね、琴美なの」

「僕は太郎です」

巻き貝、親、名前のセンスなかったのか…？

「コトミ…ポッ」

あれ？ 誰か何か呟いたか？

「…ジョージ！ しっかりしろお！ どうした、熱中症か？」

アンソニーが、ジョージの顔色が異様に赤くて、目もぼんやりこと

に気がついた。

「琴美ちゃん、キレイ」

…あちゃー…。

「お前、彼女タイプなのかあ〜？」

アンソニーが肘でつついて茶化す。女王蜂はというと、…不適な笑みを…。何をたくらんでる？

「今度、あたしとバイクで出掛けませんか？」

「いいんですか？」

「バイクの免許はお持ちのようね。…負けないわよ
何にだよ。」

「望むところさ」

…勝手に頑張れ。

俺たちはそれから意気投合して、料理を追加してしばらく海の家に居座った。

「ママあ〜…あたし眠い…」

人形を握り締める夏樹が華夏美にすがりついてきた。

「あらあら…どうしましょうか」

『夏樹ちゃん、ビーチバレーとかしないの？』

4歳の娘に無茶を言うな。

「いちご、今日は連れてきてもらって楽しかったし、また来ればいいじゃないの。ね？」

『そうね。実はまだ仕事あるしね…』

それから俺たちは外人と別れ、パラソルとかを片付けた。既に意識の飛びかけた夏樹も、半ば無理矢理真水のシャワーをさせて服を着せた。

帰りの夕日に照らされた車内は、案の定みんな爆睡。

『楽しかったですね』

『泳いでないけど、海の家ですーっと夏樹に握られてたから結局塩水とか砂はついたな』

『ミスター茨木に洗ってもらえばいいでしょ』

『そうだな』

えー…俺、帰ってもまだやることあるんだ…。

甘い災難

俺はいつものように会社に出勤した。当たり前のようにスキンヘッドでアロハで室内サンングラスのおっさん（部長）もいるし、もみ上げを撫でるアンソニーも、同僚の佐藤もいる。

「先輩、グツモーニン！」

「おはようアンソニー。今日は機嫌が良さそうじゃないか」

「わかりますう？ 実は、我が弟がデートに行ってるんですよ」

「へえ〜。彼女できたんだな」

「いえ、琴美ちゃんと」

えー！！

「朝からバイク飛ばしていきましたよ」

「お前、27だろ？ 弟は？」

「25つす」

「仕事は？」

「英語の講師だけど、仕事そっちのけですよ」

「マジで〜……」

「あれほどのストライクゾーンはこれまで会ったことがないらしいです」

「ふーん……」

張り切りすぎて事故らなきゃいいけどなあ……。

昼過ぎ。

昼休みも終わり、俺は相変わらず仕事をしていた。そこへ、隣の席のアンソニーに電話が入る。

「はい、お電話変わりました。…ええ、ジョージは私の弟ですが…

…はい…ええ…え？！ そりゃ今すぐ行きます！…はい…はい…

…はい、失礼しますっ」

急いで電話を切るアンソニー。

「どうした？」

「ジョージが事故りました!!」

「は?!」

「部長! 俺、ちょっとかなり急用です! すみません!」

「ちょっとわけありなので俺もついていきます!」

「???」

スキンヘッドはきよとんとした顔をこちらに向け、わけのわからぬまま手を振ってくれた。

『 ×病院』

俺たち2人は受付で部屋を聞いて病室へと急いだ。

「ジョージ?!」

アンソニーが病室のドアを勢いよく開けると、中に脚を吊られたジョージがいた。

「やあ兄さん」

「やあ...じゃねえよ! 何やってんだよ!」

「怪我は脚だけだよ。あとはすりむいただけだし。あ、琴美ちゃんへの心の病なら...うふっ」

「どアホ!!」

「まあまあ落ち着けアンソニー」

「はっ! あの女は?」

アンソニーが病室を見回すと、隅の方に隠れているライダースーツの女王蜂がいた。

アンソニーは彼女を睨む。その表情を見てジョージが言った。

「兄さん、彼女は何も悪くないんだよ。自分のせいなんだ」

「...どういう意味?」

俺は女王蜂を椅子に座らせ、自分もその隣に腰掛けてふたりの会話を聞いた。

「俺たち、ふたり並んで自然の中を駆け抜けてたんだ。で、とある直線の道で、彼女がヘルメット開けてこっちに微笑みかけてくれたんだ。緑の中で、彼女の表情は輝いていて、…気付いたらいつの間にか直線の終わりりで、びっくりしてハンドルを切ったら…ね」

「アホだな」

俺は一部始終を黙って聞いていたが、彼、アホだな。

「彼、よくあたしについてこれるなーってさ。上手いなーって。で、景色めっちゃめっちゃ気持ちいいし、ちょっとコンタクト取るうとしただけよ。彼にウインクしながら、一瞬親指を立てて最高だねっていう意味を示しただけ」

「…うちのバカがアホなだけだな、そりゃ」

「ごめんなさい、アンソニーさん」

「いやいや。気にすんなって。こちらこそ睨んでごめん。こいつ、琴美ちゃん大好きみたいだから見舞い来てやってよ」

「うん」

解決したか。よかったよかった。脚をギブスでガッチリ固められて吊られてるジョージもイヤな気はしていないみたいだ。むしろ愛は深まったとか？ あー、俺、なんか無駄に疲れた…？

「あー！ 雅樹ちゃんがいるう！」

いちごが病室に入ってきた。相変わらずのロリータファッションにクルクルに巻いた黒髪をふたつに結っている。手には深紅のバラの花束。それ、見舞いには間違っていないかなあ…。

「うほ〜片足ミイラか〜…ダサっ！！」

「がーん」

「落ち込むな弟よ。プラス思考で行け。怪我のおかげで美女が自分を訪ねてきてくれるわけだからさ」

「そうか！」

立ち直り早いなあオイ！陽気なアメリカ人兄弟だな！

「あ、女王蜂ちゃん。ここまでタクシーで来たから、帰りお家まで

送ってね〜
』

「了解」

ん〜…俺、場違いじゃねえ？

ボス来たる

「あなたは、罪を認めないと言うのだね？」

「だから俺は何もしていないんだって」

「ならばあなたは、あの現場で誰と話していたのだね？」

「だから、人形と」

「またその虚言か！ 精神鑑定にかけるか？ ああ？」

「異議あり！ 裁判長！ 検察官は被告人の人格そのものを否定しています！」

「裁判長！ これは重要なことなのです！」

「…では、検察官、続けて下さい」

…ガバツ！！

俺が何をしたー！？

あ…夢か…。

「あなた〜ごはんよ〜。起きて〜」

ああ、いつもの朝だ。よかった。俺は寝室を出て顔を洗い、リビングへ行く。

「…あれっ？」

『おはよう、雅樹ちゃん。お目覚めはいかが？ 今日も素晴らしいお天気よ』

「いちご…」

「たまたま通りがかったんですって」

「…いつ？」

『朝の4時過ぎに。で、ついでだから朝ご飯をいただいて帰ろうかと思って、近くの公園で時間を潰したりしてたの』

「何やってたんだよ、4時に」

『散歩』

「深夜に？」

『あら、雅樹ちゃん。心配してくれるのね。夜の散歩は涼しいし人通りも少ないから自由よ。それに安心して、あたし実は黒帯の段持ちだから。試しに朝の一勝負いかが？』

「拒否します」

俺は若干イラつきながら席に着く。なんで朝からロリータに会わなきゃいけないんだよ。

『あ、でね、まあ色々わけがありました、今日雅樹ちゃんにひつついて出勤するから。ついでに人形も持って行くから』

「はあ?!」

『しつこく質問すると、シバき回すからね雅樹ちゃん』

…という悲惨な朝、俺はいちごを連れて出勤している…。通勤ラッシュの人混みでは迷子になりそうとか言うから、いちごと左手で手を繋ぐ。いちこの左手には3バカ。…ってかなんで交通費俺持ちなんだよ!!!

何やかんやで無事に会社に到着。通勤中、周りからの視線が痛かった…。もう少しの辛抱だ…。会社に入れば…。嗚呼、駄目か…。やつぱりジロジロ見られるのね…。

「おはようございます、先輩。おやおや、可愛いのん連れて!!」

アンソニーにそう言われていちごはまんざらでもない顔をしている。

「おお茨木、奥さんと子供いるのにそんなに若い子と…? 手なんか繋いじゃって」

この手には深い理由があるんっすよ…。

俺は自分の席に着く。いちごは部長の所に行った。

『部長さ〜ん』

「お、桃色先生。新作の売れ行き、なかなか好調だよん」

スキンヘッド・サングラス・アロハとロリータ女…ここ、まともな会社なの？

『本当？ よかったわ〜。今日はね、雅樹ちゃんとたまたま会ったから挨拶しに来たの』

何がたまたまだよ。

「そうかそうか〜」

『今日は雅樹ちゃんと仕事の打ち合わせあるから、10時になつたら一緒にここを出て帰りますう〜』

「ああそう。まあじゃあ自由にしててよ」

部長、この女を泳がしておいてはいけません！

『ああ、はい。じゃあ適当に探検してきます』

神聖な社内をうるつかないでくれっ！

「はいは〜い」

許可すんな！

『雅樹ちゃん、お金』

部長のところからスキップで戻ってきたいちごは、俺にそう言った。

「は？ 知らねえよ」

『意地悪っ！ いいのよ〜ここで オタクなのをバラしてやる！』

「何っすか？ 聞きたい聞きたい！」

『あのね〜アンソニーちゃん。雅樹ちゃんつたらね〜』

「いくらだ？」

『ありがとう雅樹ちゃんっ』

俺はいちごに小遣いをやり（なんであいつ無一文なんだよアホ）、仕事にかかった。

『何ともまあ広いきれいな会社ね〜。儲かっているのね、この会社』

『これって広えの？ あたし就職したことねえからわかんねえわ』

社内を探検するいちご・人形たちは話しながらあたりを見回していた。

『リサさん、凄く立派な会社ですよ〜！』

『あたしの元カレ、こういう会社の社長だったなあ。ま、あたしは

遊びの愛人だつたけど」

『ジュリアさん、色々あるのねえ』

『モデル時代は本当にモテたんだった〜』

『ってかさ〜、どこ行こっか〜』

いちごはキョロキョロしながら歩く。彼女とすれ違う度に多くの社員がびつくりしたような顔をしている。

『社長室なんてどうだ？ ハゲたおっさんが黒皮の椅子でふんぞり返ってるって見ようぜ』

『リサさん…社長さんハゲてるかどうかわからないでしょう…』

『安心しろ。多分ハゲてるって〜』

『じゃ、決まり！ 社長室にレッツゴー！』

いちごはスキップでエレベーターホールに向かう。

『すみませ〜ん。社長室は何階ですかあ？』

いちごはエレベーターを待つ2人連れの女子社員に訊いた。

「…は？」

尋ねられた若い女子社員は目を丸くしている。

『だ〜か〜ら〜。社長室っ！』

「なんでこんなところに桃色いちごがいるのかしら？」

「知らないわよ。…どうする？」

女子社員たちは小声で会話する。背の低いいちごはそんな2人を見上げて返事を待っている。

「…社長室なら…8階」…」

『あつそ。ありがとう』

いちごはちょうど来たエレベーターにすりと乗り込んだ。女子社員2人はその様子をポカンと見ていた。

チーン

8階に到着。

『社長室ってどこだと思っ？』

『さあ…また誰かに訊けば？』

『そうね。…すみませ〜ん、ちょっといいですか〜？』
ちよつと通りがかつた中年のオジサンに声をかけた。バーコード頭に膨らんだ腹、いちごより少し高いだけの身長。

『はい…ってもしかして桃色いちご？』

中年のオジサンはいちごにそう言った。

『はい、そうですけど。私って結構有名人なんだなあ』

『僕も娘も妻もみんなあなたのファンだよ。本当に普段からロリータなんだね』

『ええ。…あ、そうそう。お尋ねしたいことがあるんですけど、社長室はどこですか？』

『社長に用？』

『用っていうか…暇つぶしです』

『暇つぶし？』

『そう』

『あはははは〜やっぱり君って面白い子だね。実は僕が社長なんだよ』

『…え！！』

『お茶でも出すよ。社長室へどうぞ』

『どうも〜』

2人は社長室に入って行った。

『いつもお世話になってます。新作も着々と部数を伸ばしてるみたい』

『君の小説は全くわけがわからなくておもしろいよ〜』

『ありがとうございます〜』

そこへ秘書がお茶を運んできた。

『ありがとうございます』

『あ、そうだ。なんでまた社内見学？』

『担当の茨木雅樹ちゃんにひつついて来たの。雅樹ちゃんとは家族ぐるみで仲良しで、旅行も連れて行ってくれたし、この前も海水浴

行ったりしたの』

「そうかそうか。茨木か。また今度コンタクトを取ってみよう」

『あ、よかつたら今夜一緒に雅樹ちゃんのおうちの晩御飯に転がり込みましょう！』

「いいの？」

『私はいつも勝手に転がり込んでます』

「ほうう」

…そんなこんなで午前10時。

『雅樹ちゃん、おうち帰るよ〜ん』

「はいはい」

俺たちは電車でいちごの家へ行った。今日は本当に無駄な交通費や金を遣わされる…。

俺たちはいちごの家で仕事の話を済ませた。今日やけに仕事の話に集中しているな。

『雅樹ちゃん、今日晩御飯食べに行くから。華夏美ちゃんにはもうメールしたから』

ああ、素直に仕事に集中した理由がわかった…。俺は気重のまま社へ戻った。

やっと退社時刻になり、帰宅の途につく。

「ただいま〜」

俺が玄関を開けると、駆け寄ってくる2人。

「パパ〜お帰り」

『雅樹ちゃんお帰り〜』

悲しいかなこのパターンにも最近慣れてきたわ…。

「茨木〜」

あれ？奥の方から聞き慣れないオッサンの声が…。

「あなたと社長さんよ」

妻…今何て言った？！

俺は慌てて靴を脱ぎリビングへ走り込む。

「……………はっ?!」

社長が…社長いるのは何故ですかあああ……………っ?!?!?!

「茨木君、いちごちゃんと一緒に伺ったよ。まさか君がこんなに彼女と親しいなんて。実はファンなんだよ」

「……………はあ」

社長が我が家ですき焼きを囲んでいる…バーコードから覗く地肌が鍋の熱気で赤らんでいる…いちごトリサがニヤニヤしている……何コレ。

「さあ、早く座りたまえ。すき焼きだぞ？」

「……………はあ」

なあ…部長…俺もうイヤ…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8414a/>

俺のリサちゃん！

2010年11月14日09時32分発行